

第 72 回国立大学図書館協会総会研究集会議事要旨

日 時：令和 7（2025）年 6 月 20 日（金）9:30～12:10

会 場：東北大学百周年記念会館「川内萩ホール」（YouTube Live 配信あり）

テーマ：学生のための大学図書館を問い直す：ユーザーエクスペリエンスの視点から

司 会：次良丸章（名古屋大学附属図書館事務部長）

プログラム：

趣旨説明：佐久間淳一（名古屋大学副総長・附属図書館長，言語学）

話題提供：教育者・図書館長の立場から

- ・ 川合真紀（埼玉大学副学長・図書館長，植物生理・分子生物学）
- ・ 柏原昭博（電気通信大学附属図書館長，情報学）
- ・ 川島優子（広島大学副学長・図書館長，文学）
- ・ 浜田久之（長崎大学附属図書館長，科学教育（医学教育）・内科学）
- ・ 内田誠一（九州大学理事・副学長・附属図書館長，画像情報学）

話題提供：国内外の事例

- ・ 金藤伴成（京都大学附属図書館総務課長）
- ・ 富岡達治（名古屋大学附属図書館情報管理課長）

パネルディスカッション・全体ディスカッション：

パネリスト：川合真紀（埼玉大学副学長・図書館長，植物生理・分子生物学）

柏原昭博（電気通信大学附属図書館長，情報学）

川島優子（広島大学副学長・図書館長，文学）

浜田久之（長崎大学附属図書館長，科学教育（医学教育）・内科学）

ファシリテーター：内田誠一（九州大学理事・副学長・附属図書館長，画像情報学）

記 録：端場純子（浜松医科大学附属図書館学術情報課長）

梶原茂寿（大分大学学術情報拠点学術情報課長）

趣旨説明

佐久間淳一（名古屋大学副総長・附属図書館長，言語学）

- ・ 今年 2 月にまとめられた「我が国の『知の総和』向上の未来像～高等教育システムの再構築～（答申）」（中教審第 255 号）では「学修者本位の教育の更なる推進」が謳われている。
- ・ 現在検討が進められている国大図協次期ビジョンの策定方針においても重点領域とし

て「新たな知を紡ぐ＜場＞の提供」が掲げられている。

- ・ 図書館は学修者本位の教育の担い手であることを期待されているが、はたして学生を中核に据えた教育を十分提供することができているだろうかという問題意識から「ユーザーエクスペリエンス」という言葉を使っている。
- ・ 昨年発表された「オープンサイエンス時代にふさわしい「デジタル・ライブラリー」の実現に向けて～2030 年に向けた大学図書館のロードマップ～」の中の「多様化する高等教育とその学修者のニーズに対応して、いつでも、どこでも学ぶことを可能にし、学修者本位の質の高い教育・学修の実現に資する」という部分が本テーマと関係する。
- ・ 「デジタル・ライブラリー」に転換する中で学修者本位の教育を実現するにはどうしたらよいのか、学生本位の視点、ユーザーエクスペリエンスという観点を意識して、学びの場としての図書館について考えてみたい。
- ・ 図書館の将来像について様々な切り口で話題提供し可能性を検討する。

話題提供：教育者・図書館長の立場から

川合真紀（埼玉大学副学長・図書館長、植物生理・分子生物学）

- ・ 学生と図書館との新しい関係を模索している事例について紹介する。
- ・ コロナ禍が明けて数年経つが、入館者数はコロナ禍前の約 8 割弱であり、図書館に学生が完全には戻ってきていない。
- ・ 要因として、コロナ禍でオンライン化が進んだこと、現在では学生も教職員も電子ジャーナルやデータベースを使用することで物理的に図書館に調べ物に行くという必要性が低くなっていること、オンライン講義が普及することでそもそも大学に来る時間が減ったことが考えられる。
- ・ このような中で図書館は学生にとって新たな価値を持つ場所へ転換する必要があると考える。
- ・ 埼玉大学ではいくつかの取り組みを行っている。
- ・ 「図書館の共創スペースの強化」：図書館の改修工事を行い、可動間仕切りや移動机などを設置することにより学習環境を改善すると共に、共創活動の拠点としてフレキシブルに利用可能なイノベーションコモンズに生まれ変わる。地域企業との共同研究の打ち合わせや、成果発表の場などとして活用する。
- ・ 「図書館で学生実験」：図書館を学生実験で使用してもらっている。図書館の機能に支障がない範囲であれば積極的に使用してもらい、図書館が学習・研究の場になることを支援している。
- ・ 「ライブラリー・アシスタント (LA) の活動」：学生の様々な学修支援を目的として LA を任命。館長・図書館職員と直接意見交換をし、業務の見直しや新たなイベントの計画を行っている。
- ・ 図書館を活性化するための試みとして、LA との活動で生まれたのが「みんなのラウン

ジ」。

- ・ 「大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業」に本学のプログラムが採択され、実施目的が一致していたためその事業の一部として資金援助を受けることができた。
- ・ コンセプトは、国籍・学部に関係なくわいわいするイベント。半年前にボードゲームを主体として第 1 回を開催し、回を重ねるにつれて参加者数も増えてきている。参加者からの評判がよく、新たな経験ができる場を提供するという図書館の新たな可能性を感じている。
- ・ コロナ禍にオリエンテーションの代わりとして漫画版の図書館案内を作成し、図書館のキャラクターを創作した。職員が考案、学生募集で命名。今後何らかの展開ができるとよいと考えている。
- ・ 図書館の未来像として新たな価値のある場所への転換を目指している。そのためには学生のアイデアを引き出すことやそれをスキルある図書館職員が支えること、それを予算的にも大学が後押ししていくのが理想である。

柏原昭博（電気通信大学附属図書館長、情報学）

- ・ 学修者本位の教育として本学が導入した教育 DX システムについて紹介する。
- ・ オンライン教育により顕在化してきた問題点として、学修者間、学修者・教育者間において、知識のコミュニケーションが行き届かない、活性化しないという問題と、知のリソースとの出会いが減っているということがある。
- ・ 学修者の思考が孤立化し、知的好奇心が高まっていけないことで、創造的な活動やイノベーションが起こりにくい状況になっており、深刻な問題と捉えている。
- ・ 情報通信技術を使って異なる学修空間をつなぐことにより人や知との出会いを作り出し、知識のコミュニケーションを活性化して知的好奇心を高めようという試みを進めている。
- ・ 図書館としてコミュニケーションをいかに活性化するか、技術を使っていかにサポートするか、または知的好奇心をいかに高めるかが大事だと考えている。
- ・ システムの一つとして令和 5 年から教育 DX システムを実装した。「学修空間をつなぐハイブリッド教室」と「出会いを作る VR キャンパス、ユビキタス・デジタルサイネージ」からなる。
- ・ ハイブリッド教室は、遠隔と対面、キャンパス間の教室、実空間と仮想空間を Zoom でつなぐ。図書館にも学生専用のハイブリッド教室を設けており、学生が自由に来て遠隔の学生同士で議論できる場になっている。臨場感を持てる形でコミュニケーションすることが可能。
- ・ 遠隔の学修者のテレプレゼンスを対面の学修者に提示するためにロボットを導入した。ロボットの動きを通して、対面の学修者が遠隔の学修者の存在感、テレプレゼンスを感じ

じることができる。また遠隔の学修者は操作を通して参加している感覚を高めることができる。

- ・ 異なる空間で思考を共有するために、大きなサイズのタッチパネルを用いて学修者が資料を共有したり書き込んで議論を行ったりできる。図書館にも同じスペースがあり、マイクレスで遠隔に声を届けて図書館のラーニングコモンズの中で議論できる環境を整えている。
- ・ 出会いの促進のため VR キャンパスとユビキタス・デジタルサイネージを設けた。学生主導で VR キャンパスを作る試みをしている。
- ・ サイネージシステムは、できるだけ多くの建物にサイネージやディスプレイを置いて本学の最先端の研究を分かりやすく説明したり、学生が開発したアプリの情報を流したりしている。学修者の興味を引くための取り組みである。
- ・ 知の創造や知の共有のためには知のコミュニケーションが不可欠。特に大事なものはつながろうとする学生や教員たちのきっかけをうまく作り出すことである。技術を使うといろいろなデータを集めることができる。AI の技術と組み合わせて、個々の学修者に応じた知のコミュニケーションサービスを提供する支援システムを作っていきたい。

川島優子（広島大学副学長・図書館長，文学）

- ・ 文学部の教員の立場から、新入生向けに行ってきたゼミの一部を紹介することにより学修者本位の教育の実現を考える上での話題を提供したい。
- ・ 広島大学では新入生を対象とした問題発見・解決型の教養ゼミが設けられており、自身のゼミでは 10 年ほど前から漢文をテーマにしている。ゼミでは一次資料である漢文の教科書をできるだけ網羅的に見ていくという方法を取っている。
- ・ 調査手段として、広島大学図書館の教科書コレクションがある。2001 年にデジタル化が完了し、現在 4,400 点ほどを公開している。
- ・ 過去の教科書の変遷を調べることで、漢文教育が戦前は日本の漢文中心で戦後は中国古典中心へと変化したことが分かり、学生はそこから問いを深めて教育や文化の本質を考察していく。
- ・ デジタル公開により大量の資料を同時に複数名が場所に縛られず閲覧することができ、さらに検索によって資料の絞り込みができるようになったことで初めて教育レベルで利用可能になったといえる。デジタル化・OA 化が進むことは人文学の学生にとっても非常に有益である。
- ・ 一方でそうした情報にユーザーは実際にどこまでアクセスできているのか、どれだけ使いこなせているかという疑問も現場の教員として持っている。学修者本位の教育の実現のためには、学生、あるいは学生にその価値を発見させるべき教員に対するデジタル・ライブラリーリテラシーの向上に向けた取り組みも図書館に今後より一層必要になってくるのではないか。

浜田久之（長崎大学附属図書館長，科学教育（医学教育）・内科学）

- ・ フクロウ館長として5年ほど学生のための大学図書館作りをしてきた。
- ・ 学長から学生ファーストの図書館に改革してくださいと言われ，予算が厳しい中でなんとか盛り上げようとやってきた。
- ・ 一部業務委託をやめて職員が前面に立ち，学生と対話をするようにした。
- ・ 館長就任時は図書館来館者や貸出数が減っている状況だったため，職員とワークショップを行い，図書館の役割を見直すことに時間をかけた。利用者，サービスについて原点に立ち返り一からやってみようと思った。
- ・ 「利用者ファースト」と「効果的な情報発信」を2つの柱とし，スローガンと細かな目標を作った。ポスター発表しているので見ていただきたい。
- ・ 学生の声を反映した環境改善や学生を呼び込むための利用促進策を実施している。
- ・ SNS活用や地域連携，イベント開催で図書館の魅力を発信している。
- ・ 入館者数は増えたが貸出数はまだまだで，継続していろいろな取り組みを行っている。

内田誠一（九州大学理事・副学長・附属図書館長，画像情報学）

- ・ 昨今のAIの進歩状況からこれからの図書館の利用者向けサービスはどのようなことになるかを妄想した。
- ・ AIは非常に進歩しており身近なところでは「Deep Research」という文献調査ツールが便利で文献検索に加えてサマリーもつけてくれる。文献調査機能としてはこの方向になるのではないかな。
- ・ 妄想の1つ目は，図書館は最先端のサービスの提供窓口になっていくのではないかなということである。今後は知だけでなく知性に関係するような様々なサービスの提供窓口，ショールームのような機能が拡充されていくのではないかと考えている。また，個別化する学びの矯正，健全な知を育成するための図書館というのも重要になるのではないかな。
- ・ 2つ目は，図書館は非日常的な場としての価値を生むのではないかなということである。デジタルデトックスのようにAIデトックスという言葉が出てくると思われる。そういった場としての図書館の学習個室も重要になる。さらにタイパの逆方向として，例えば書架を見ながら本を探すことも新しい価値として捉えられるのではないかな。
- ・ 3つ目は，個別に学修するようになると他の人の学びが見えなくなるが，図書館は他の人の様子が見られる場所として重要になると思われる。グループ活動ができる場を提供することも大事である。また，自習できない学生もいるはずで，そういった学生には人間のメンターが引き続き必要と考える。学び方の学び方を教えるメンターや，自分の学びに不安を抱く学生へのメンターも必要である。
- ・ 4つ目はモノとしての本の意義である。改ざんできないという意味で，図書館の本とい

うのはファクトの最後の砦になり得るのではないか。

- ・ 最後は、今図書館を悩ませているジャーナルが不要にならないかという妄想である。AI 査読が進歩しており、人間が査読しなくなる時代が来るかもしれない。AI 査読で質の保証が出来るのであれば、グリーン OA でジャーナルに頼らなくてもよくなるかもしれない。ただし AI が査読する世界が健全かどうかは議論の余地がある。

話題提供：国内外の事例

金藤伴成（京都大学附属図書館総務課長）

- ・ 1 年前に文科省の 2030 デジタル・ライブラリーの推進に係る調査の一環として世界の 4 つの大学を訪問した。調査項目の一つが「場としての大学図書館」である。
- ・ シンガポール国立大学は建物のフロアごとに様々な機能を分割させている。静寂空間、アクティブラーニングスペースのほか、デジタル技術を使ったコンテンツの作成と人的サポートが行われていた。
- ・ スイス連邦工科大学は一般的な図書館のイメージで、学生が机を並べて勉強していた。連邦工科大学のローザンヌ校は日本の建築ユニットが設計したロレックスラーニングセンターという印象的な建物である。新しい教育の場とは何か考えて提案してほしいとの要請を受け、出会いの場が少ないことから、居心地の良い場所を作ったということである。
- ・ アメリカのニューヨーク州立大学のバッファロー校は 5 つの大学図書館があるが、うち Oscar A. Silverman Library は紙の本を置かない図書館として、デジタルコンテンツの作成などを行う空間に生まれ変わらせたとのことである。情報機器の整備のほか人的支援が行われていた。
- ・ 全体に、知を生み出したり人間関係を作るといった支援を大学や大学図書館が行っているという印象。
- ・ 各大学の多様な取り組みを参考にしながら、自分の大学で学生のために何ができるかを考えることが重要であると考えた。

富岡達治（名古屋大学附属図書館情報管理課長）

- ・ 研究集会に合わせて、学生のための大学図書館に関する会員館の取り組みについてポスター発表を企画した。国内の事例として報告する。
- ・ エントリーのあった 14 機関の取り組みについて、4 つの観点で整理した。
 - 「学生の主体的な学びと成長の支援」：個別相談・ピアサポートの充実、講習会の実施や、それらを通じて個人から横の発展につながる人的支援の取り組み
 - 「学習環境と施設の革新」：DX 関連、リアルな場の提供、ハイブリッドな学習環境の提供といった、デジタルを含めた場の提供に対する取り組み
 - 「情報資源の活用と提供」：学生のニーズや授業連携を反映した選書、資料の利用

の掘り起こしなど、図書館資料の提供に関する取り組み

- 「学生と連携した図書館運営と広報」：図書館と学生双方が成長する取り組みや学生からのフィードバック反映，SNS など多様なメディアの活用など，学生協働や広報に関する取り組み

- ・ 各機関のポスターを一言ずつ紹介する。実物もぜひ見ていただきたい。

パネルディスカッション・全体ディスカッション：

ファシリテーター：内田誠一（九州大学理事・副学長・附属図書館長，画像情報学）

内田：事前の打ち合わせで取り決めをしておらず予定調和はない。何かをまとめるのではなく，いろいろな意見が出る中で参考になればよいと考えている。フロアからも遠慮なく発言してほしい。

最初にパネラーに聞く。今より多くの学生に図書館に来てもらうためにはどうすればよいか。こういったパネルは暗くなりがちなのでもし予算が無限にあったらという仮定でもよい。

川合：究極の質問と思う。大学の図書館に夢を持って入学してたくさん利用したいと思ってくれている学生は確かにいる。その一方で全然来なくなってしまう学生も一定数いる。そのために埼玉大学では出会いの場の提供を行っている。図書館では出会いの場として「みんなのラウンジ」を立ち上げた。今後これを進めていきたい。

内田：学生は見ず知らずの人たちと急に話し出すのか。

川合：世話係として LA がいる。誰でも知っていて，かつ言葉が通じなくてもできるゲームを LA が仕切って行っている。

柏原：大学の使命を知の創造やイノベーションと考えると，単に学生が授業を受けているだけではそういった考えに至らない。大学で行っている最先端の研究や自分の興味を高めるようなリソースとの出会いがきっかけとして非常に大切である。オンライン教育が浸透し，学生同士の会話が減っているような状況では好奇心を高める機会がなかなかない。サイネージなどで情報を目にしたり同志を見つけて話し合ったりする場を作ることが重要である。

内田：図書館の外から情報提供するということか。

柏原：インターネットなどは自分から情報を取りに行く。図書館も学生が来るのを待っているのが基本姿勢。学生が情報に触れる機会を増やす工夫やタイミングも重要である。

川島：学生は原始的で身体的なものを求めている気がしている。学生の投書を見ると暑い・椅子が固いといった声が聞かれる。また，広島大学で行っている学生生活実態調査の最新版では，「大学構内の滞在時間のうち多く滞在する場所はどこか」という質問に対して，研究室に所属していない低学年層では，教室以外では図書館が一番多い。「大学構内にくつろいで過ごせる場所があるか」という設問では図書館が最も多く，特に低学年で値が高い。一人っていると友達がいらないと思われてしまうかもしれないが図書館は堂々と一人でいられる場

所であり、そういった意味でもニーズがあるのかもしれない。快適・安全・安心な空間をまず提供したいと考えている。もう一つは出会いの場であり、広島大学では留学生と日本人学生のコミュニケーションの場を作ろうとしている。双方のニーズに応えられる場所が作れるとよい。

内田：広島大ではすでに図書館がくつろげる場所であると。

川島：くつろいでいる学生から椅子が固いとか、暑いとか寒いとかいう声が上がっている。クッションやひざかけを置くなど、予算がない中で快適にする方法を模索している。

内田：予算が無限にある仮定だと…？

川島：まず空調を変える。

浜田：予算が無限にあればイベントをできるように人を雇いたい。いろいろなイベントをやっているが続けるのが難しい。賑わいを作るという意味で人が大事だと思っている。例えば去年から始めた子供塾は 1 年続いているが毎週学生ボランティアや中学生が集まっている。そういった地域とのつながりなどで賑わいを作りたい。

内田：イベントは真面目なものが多いのか。

浜田：コンサートをやりたいがうるさいからなのか反対される。やりたいことは多いが人手が足りない。

内田：学生を増やす試みはそれぞれ萌芽が見えているように思われる。次のトピックでは、先ほどの事例紹介でバッファロー校が本をなくしたという話があったが、物理的な本が必要かどうか伺いたい。

柏原：個人的には物理的な本も見るが情報はインターネットでも得られる。ただ人間は身体性を持っており、本を取るといった作業や、どのページのどのあたりにあるか感覚的に感じるといったプロセスが知を得ていくという過程において大事だと感じている。AI が進化してもこういった作業は必要ではないか。

内田：自分も本が好きだが今は紙の本を幼少期から触っていない子供もいるかもしれない。インターフェースとしての本の素晴らしさ、物理的なインターフェースをどうやって若い人に教えられるかが課題になるのではと思うがどうか。

柏原：それは本当に難しい。新しい学生たちにとっては、新しいメディアや新しい技術を使って読むということ自体が意味を持つことが十分可能で、そういう世界になるのではないか。そのような学生たちに昔に戻って教える必要性はないのではと思う。年代に応じてということになるのではないか。

浜田：物理的な本は必要であると思う。村上春樹の小説に、電子社会の中で主人公が図書館に蓄積されている個人の記憶を触って読む、という場面がある。多感な時期に五感で感じて何かを得るということは大切である。少なくとも大学図書館は物理的な本は取っておくべきではないかと考えている。

川島：学生にとってどうか、ということと視点がずれるかもしれないが、物理的な本が必要

かという問題について。中国文学では過去のテキストを使うが、当時のものが残っておらず後の時代のテキストを使って研究する場合、人の手が加わっていないかという問題がある。古いものをきちんと残すことも必要であるし、文字が置き換わっていた場合に誤植なのか意図があるのかが研究対象になることを考えると、物としての本は保存しておくべきと考えている。

内田：もし 100%改ざん不可能な画像メディアができたらかどうか。

川島：先ほどの理屈でいうと、もしそういったものが間違いなくあればそれでもいいのかもしれない。

川合：図書館が今後本を紙で持つのはナンセンスだと思う。ただし昔の本や貴重な本は実物で持っていてほしいと思っている。自分は歴史的な論文の実物を図書館に探しに行って手に取って感動した記憶がある。今後の学生にそういうことを味わう機会を残しておいてあげたいと思う。一方で研究者としては電子ジャーナルの問題で困っており、すべての研究者がすべての論文に自由にアクセスできるようになったら素晴らしい。相反することだがネットの充実への期待と本の価値も維持してほしいという気持ちを持っている。

内田：本の価値を維持させるきっかけが必要と思う。後でフロアの方から名案があったらお聞きしたい。ここでフロアからの質問に移る。

内田：本日のテーマ、学生のための図書館はどうあるべきか、ユーザーエクスペリエンスの観点から、についてフロアからご自由にご発言いただきたい。

東京農工大学 伏見館長：教員として 2 つお伺いしたい。コロナ禍でオンライン教育が進んだことで、悪影響が 2 つ出てきていると感じている。1 つはインターネットで自分が興味のあるものを辿っていくという読み方をする中で、異なる意見があるという視点が減り、結果として視野が狭く深くなっている学生が増えているのではないか。その点では紙の資料は関連する事や他の情報が入ってくるので、ある程度有効ではないかと思う。2 つ目は、自分で情報を集められない学生の成績が芳しくなく、二極化がかなり進んできているのではないかと思う。ご意見を伺いたい。

柏原：個人的に研究テーマの一つでもある。ご指摘のとおり、インターネットでは特定の情報に囲まれてしまい他の情報が見えなくなるという現象があり、非常に大きな問題である。生成 AI がそれに拍車をかけており、答えに至るまでの探索がなくピンポイントで答えが得られるようになってきたという弊害がある。学ぶ姿勢を学ばせることが大切であり、情報リテラシーや AI リテラシーが非常に重要である。本学でも注意している。図書館でも学修支援という立場ではそういったリテラシー教育が重要と思う。

浜田：コロナ禍のときに医療系で問題になったのはコミュニケーション能力が落ちたということ。試験の成績は良くなったがコミュニケーション能力がかなり落ちていて現場で問題になっている。VR 技術も駆使しているが五感を使うコミュニケーション能力はなかなか

身につかない。

内田：先ほどのご指摘で、物理的な本はつまみ食いでできないという点が面白いと感じた。

川島：先ほどお話しした教科書コレクションは検索すれば広島大学にあることは分かるが、教科書について調べたいという明確な意図を持って検索しなければたどり着かない。一方で、どの大学にどんなデジタルコレクションがあるのか緩くまとめたサイトがあれば書架を歩くような形で自分の専門とは違う出会いがあるかもしれない。実際にそのようなサイトがあるようだ。もう少し緩い検索ができるとよいかもしれない。学生の二極化は自分も強く感じている。自分自身も同じと思っており、どのように情報を取ってきたらよいか教えてほしい。

内田：ツールの使い方が苦手な人に対して、うまくいっている例があったらぜひご紹介いただきたい。千葉大はどうか。

千葉大学 竹内館長：千葉大が成功しているということはない。デジタルと紙の本が話題になっていることについて、2030 デジタル・ライブラリーというコンセプトを書いた責任者の一人として申し上げると、デジタルになるということはイコール紙の世界を否定することでは全くないということが前提にある。紙というインターフェースそのものをまだ現時点では多くの方が重要なもの、必要なものと思っている中で、それを図書館のコミュニティがよいものとして守っていくためには、外側にはデジタルというものがないとダメだというのが基本的な考え方であって、その点はぜひ誤解のないようにしていただきたい。

内田：大事なご指摘である。ほかに AI 教育、デジタルリテラシーの件でご意見のある方はいるか。いなければ次の質問に移る。

金沢大学 杉山館長：ポスター発表の場で、コロナ禍以降来館者はかなり戻ってきたが貸出冊数が全然戻っていないという話をいろいろな方から伺った。本学も同じであり、原因が分からない。分析したという話があれば伺いたい。また、紙が不要と考える人は学内にもいるが、デジタル化したから紙は捨ててよいという理屈に対してどのように理論武装しているか。さらに学生の居場所という意味では、発達障害や音過敏・光過敏の学生に対して大学図書館としてどのような支援を行っているか伺いたい。

内田：竹内先生から昨日伺ったところでは、海外では来館者数は減っていないということだったが冊数についてのご存知か。

竹内：先ほど金藤課長から報告があった世界一周に自分も同行したが、どこの図書館も入館者数は減っていない、むしろ増えているということだった。コロナ禍を経て学生たちはリアルな場で人と会うことを重視しているという答えて、利用者数が減ったのは日本特有と考えてよいのではないか。このことについて、きちんとした調査を日本はまだやっていないという大きな課題がある。これをやらないと、図書館の提案が本当に学生のニーズや行動パターンに合っているのかどうか分からないまま手探りが続いてしまう。時間的な余裕はなく、積極的に取り組む必要がある。教育も同じ問題を抱えておりおそらく図書館だけの問題ではない。大きなコンテキストの中で、では図書館は、という考え方をしなければならない

と考えている。

内田：文科省は何か調査を行っているか。まだこれからか。

浜田：長崎大学で本を借りている人・借りていない人を学年別で調べた結果によると、貸出数 0 の割合は 50% くらいである。借りている人は年間 10-13 冊で、平均すると 5 冊くらいになる。おそらく今読んでいる人はほとんど昔と変わらない。借りていない人の割合が増えたということではないかと推測している。借りていない人に聞いたところでは、YouTube のほうがタイパ・コスパが良いということだった。若い人には YouTube のほうがコンテンツ的に勝っているのかもしれない。全国的な調査をしていただきたいと思っている。

内田：ジャンル別のデータがあると面白いかもしれない。

川島：先ほど教育と図書館の問題を結び付けて考える必要があるという話があったが、今の中学校・高校で読書がどのように学校教育に組み込まれているのかが関係するかもしれない。

浜田：去年の全国図書館大会でも話題になったが、県によって違うようだ。以前は全国的に実施していたが高校生は忙しいのでなかなか時間が取れないという発表があった。そういった影響があるかもしれない。

金沢大学 杉山館長：新しい学習指導要領の学生が今の 1 年生である。例えば国語が文学国語と論理国語に分かれており、大学で 3 年ぶりに文学の授業を受けたという学生がいる。そういった変化が大きいのではないか。10 分間読書については、『『若者の読書離れ』というウソ』という本で、OECD の指標の嵩上げが目的ではないかという指摘がされていた。小中学校では盛んに行われているが高校になると有意に落ちてくるという統計があるそうだ。そうするとやはり高等教育だけの問題ではないと思われる。また YouTube が優位であるというのは自分もユーザーなので肌感覚でそう思う。その中でどうやって魅力を出していくのかという点は、館長であり教壇に立つ教員である我々が強く意識しなければならない問題ではないかと感じた。

内田：全部の質問に答えられていないが、時間もあるので一つくらいフロアからどうか。

一橋大学 野口館長：図書館だけの問題ではなく日本の全体のシステムの問題であったり、教育の問題であるという大変大きな話があったが、大学の中でも図書館だけでなく、教育や教務、学生・修学支援、施設・設備の問題、財務の問題、留学生の問題など他部局との連携が非常に重要になってきていると日々感じている。他部局との連携について経験や工夫があればぜひ伺いたい。

川合：自分は去年から副学長という立場で図書館長を務めているが、それ以前の館長は各学部の持ち回りだった。大学執行部とのつながりが弱いため現在の形に変わった。学長から図書館と大学を繋げるのが役割だと言われているので日頃から意識している。

柏原：今日ご紹介した本学の教育 DX システムは図書館が中心というわけではなく、大学で推進してきた。その中で図書館、e ラーニングセンター、執行部と連携を取りながら進めた。オープンサイエンスに関しては本当に図書館だけの問題ではなく、特に研究データはいろ

いろいろな問題がある。技術的な点は情報基盤センターが、方向づけは執行部がやっていかなければならない。図書館もそこに含めてもらって進めているという状況である。

川島：ご指摘のとおり、国際、教育、財務、施設などいろいろな部署と連携していかなければならない。広島大学では国際部と一緒にグローバルラーニングセンターを立ち上げようとしている。アナログな方法ではあるが、普段から他の部署の副学長や理事とコミュニケーションを取って情報共有に努めている。

浜田：2か月に1回、直接学長と話をしている。現状や進捗を説明してアドバイスをもらっている。また、各学部長が集まる会議で学部ごとの来館者数や貸出数のデータを示すようにしている。図書館の本を課題にした授業を依頼するなど、情報をできるだけ発信するようにしている。

内田：確かに学内でもっと使ってもらえるとよい。埼玉大でも図書館を実験に使ってもらうという話があったが、そういった新しい使い方があると再認識した。もっと質問を受けたかったが、ここで時間が来たのでまとめとする。

佐久間：登壇者の先生方、積極的に発言いただいたフロアみなさまに感謝申し上げる。各大学で図書館に人を呼ぶ努力をされているが、リアルな場所だけでなくバーチャルという話もあった。図書館の利用目的はいろいろだが、来てもらうためには、図書館に行けばいろいろな支援が受けられるということを学生に知ってもらう必要がある。そのために何をすればよいか、ポスター発表での気づきもあったことと思う。予算が無限にあればという話もあったが実際は悩みつつ進めていかなければならない。そういったときに、大学間で意見交換や情報共有、連携ができるとよい。また同時に学生の意見を聞くことも大切である。最近ではデジタル化で図書館がいらないという議論もある。デジタル技術の活用は言うまでもないが、紙のインターフェースは図書館として守っていく必要がある。そのために理論武装や実績が必要だが、来館者数や貸出冊数の減は学習指導要領を含めて教育の在り方など広い問題とつながる部分もあり、難しい問題である。しかし時間的な余裕はないので図書館として他部局とも連携して進めていかなければならない。課題は多いが、この研究集会が検討のきっかけとなるとよい。また次期ビジョンの検討においても参考となれば幸いである。本日はありがとうございました。

以上